分野番号２　中学校　生徒指導の部

規範意識の向上を目指した組織的且つ積極的な生徒指導について

吉野町立吉野中学校　教諭　紙岡　秀樹

１　実践内容

(1)　はじめに

前任校で13年間、本校で１年間、生徒指導主事を務めてきた。生徒指導事象への対応には教師集団が指導の目的・方法を共有し、組織として早期に対応しなければならないこと、さらには、学校教育活動の中で、規範意識の醸成をはじめ生徒指導事象を未然に防ぐ積極的な生徒指導の具現化に取り組んできた。

(2)　教師集団づくり

前任校で生徒指導主事の任についた15年前と今とでは、生徒指導事象を取り巻く状況に大きな違いがある。

前任校の所在する町は、宅地の開発が進み、特に都市部からの転居流入も多く、都市型生活様式が定着しつつあった。交易的にも都市部とのつながりが深い上に情報ツールの発達によって、都市部の中学校の「荒れ」（＝喫煙、暴力行為、無資格運転等）が当たり前のように拡がっていた。在籍生徒数は800名を越えていた。学校では、毎年、多くの教員の転出入があった。特に、転出は「経験者」、転入は「初任者ないし若年教員」で、「組織」としての対応ができない状況であった。対応は学級担任又は学年担当者任せとなり、消極的な生徒指導に終始した。この状況下で、生徒指導主事として、「校則の徹底とあいさつの励行」を生徒指導目標とし、徹底した生徒理解、「報告・連絡・相談」の励行による教師集団作りを喫緊の課題として次のように取り組んだ。

大人数の教師集団であったので、先ずは教師同士のコミュニケーションを大切にして意思の疎通を図った。続いて、各学年の生徒指導体制を強化するために週１回の定例生徒指導部会を設け、各学年の生徒の実態報告を基にした情報の共有化に努め、組織的対応が可能なように意思統一の徹底を図った。「報告・連絡・相談」の三原則の上に、「記録の徹底」を加えた。

校内の指導組織の構築と強化とともに、保護者との人間関係の構築にも力を注いだ。その結果、生徒の変容に手応えを感じるとともに、組織対応の大切さを教員が認識しつつあると確信できた。生徒の荒れは多くあったが、保護者が我が子を叱れたこと、指導方針に理解を示してくれたことが、現在の状況とは全く違う点である。

(3)　組織的且つ積極的な生徒指導

同じ中山間地域に位置するが、小規模校である本校への転勤を機に、生徒指導主事としての目標を、「小規模校における組織的且つ積極的な生徒指導」へとシフトさせた。

在籍生徒数156名という小規模校ではあるが、生徒指導事象は頻発していた。問題行動を引き起こす生徒は限られていたが、生徒同士の人間関係が問題を複雑化させたり、追随的・黙認的な取り巻きの生徒の姿勢が問題を長期化させたりしていた。また、

組織が機能せず、学級担任が問題を背負い込むケースが多くあった。

そこで、生徒の実態把握・現状認識の重要性や、具体的な指導内容を教員集団で共通理解しなければならないことを説明した。また、問題行動を引き起こした生徒及び保護者への学級担任としての対応の在り方、及び学年教員集団の果たすべき役割、管理職をはじめとする全教職員への報告等を、具体的且つ計画的に提示する必要があった。

さらに、取り巻きの生徒を変容させるために、「自己決定の場を与えること」、「自己存在感を与えること」、「共感的人間関係を育成すること」という生徒指導の３つの機能を全教員が心に留めて実践に当たった。勤労生産・奉仕的活動を通しての「自己決定から自己存在感」を生徒に体得させる取組。「校内川柳コンクール」への応募活動を通した自己存在感と共感的人間関係の育成に向けた学級での取組。さらには、全校朝会での部活動報告や学校行事の感想発表などの言語活動を取り入れた生徒の主体的活動機会を設け、自己存在感と共感的人間関係の育成に向けた全校での取組。このような取組を通して少しずつではあるが教員集団がそれぞれの分掌の中で、積極的な生徒指導を実践に移している。これにより、生徒の規範意識が徐々にではあるが、向上するとともに、安心して学校生活が送れることの素晴らしさを生徒自身が実感できつつあるように感じる。

生徒会清掃奉仕活動

2　課題

穏やかな風土の中山間地域にある本校であるが、都市型生活様式の浸透、価値観喪失社会等による家庭崩壊、保護者の意識変化等を考えると、今後、なお一層、組織的且つ積極的な生徒指導の推進が不可欠である。そして、少人数の本校だからこそ「生徒の内面に入り込む、きめ細やかな指導」を徹底しなければならない。また、保護者や地域に向かって将来を見据えた具体的な生徒指導方針を発信することも大きな課題である。さらに本町の小・中学校の全ての教員が発達段階に応じた具体的な指導事項を共通理解することも喫緊の課題である。

現在、「吉野町人権教育研究会」及び「吉野町生活指導協議会」の場において、「本町の子どもたちをどう育てていくか」に関して、校種をまたいでの無理のない基本的な指導として「あいさつのできる子どもの育成」に向けた実践的な取組が実現しつつある。「校園内でのあいさつ」や「通園・通学途上での地域の人々とのあいさつ」に、保育所・幼稚園、小学校、そして、中学校と連続した取組の必要性を感じてのことである。

「あいさつ」に関する取組を基にして、校種を超えて教師同士が幼児児童生徒の実態把握の機会をより多く設定し、積極的な生徒指導の実践が継続して行われているかを相互に確認・検証していきたい。

分野番号２　中学校　生徒指導の部

人権教育を核に据えた生徒指導体制の実践について

五條市立五條東中学校　教諭　楳原　敏男

１　実践内容

(1)　はじめに

本校へ転任して８年目を迎えた。平成21年度より生徒指導主事という職を任せていただき、４年目を迎える。私は、学校長をはじめ教職員に理解をいただき、論語「過ちて改めざる是を過ちという」を生徒へのメッセージとして校内掲示し、また授業参観等で来校される方々にも発信している。掲示している文言に、「人は誰でもあやまちを犯すが、あやまちを犯したことに気づきながらもあらためようとしない、これこそ本当のあやまちである」と補足した。このメッセージを本校の規範意識を高める上での基軸と捉え、生徒指導実践に繋げている。

また、本校の教育目標である「自ら学び、進んで行動する」「思いやりの心をもつ」「体力づくりに励む」を全校集会等で伝えるとともに、人権が尊重される人間関係づくり、すなわち、お互いの良さや可能性を認め合える仲間の育成を図っている。そのためには、まずは教師間のコミュニケーション、日々の報告・連絡・相談等の徹底を図ることを本年度当初に掲げた。学年を超えた組織体制の大切さと、「昨日の反省課題を今日に繋げるため、今日一日の生徒指導として、いかに目標を決め、指導を推し進めるか。その成果なり課題を明確にし、該当する生徒の保護者と協力体制をいかに築くか」という方針を踏まえ、毎朝の職朝で全職員に生徒指導上の課題を伝え、実践体制を推進している。

(2)　具体的取組

①　全職員、保護者への繋がり・広がり

２週間に１回を基本に放課後、校内生徒指導委員会を開き、各学年間の情報交換をはじめ重点指導項目を決め、検討課題を協議し、実践に繋げている。また、日々の状況変化を念頭に入れ、毎朝の職朝において一日の実践課題を「簡潔かつ的確」に伝えることを実践している。

・　新入生保護者説明会（１月）及び新年度始業式に、学校における携帯電話の取扱いについて全保護者に配布し、本校の携帯電話許可制度について説明。規則や規律について徹底的に浸透させる。

②　子どもたちの背景を知る

特別支援学級、あるいは、教室に入りにくい生徒（適応指導教室で学習している生徒）への支援の手だてとして、校内人権教育推進委員会とリンクし、学年を超えた該当生徒への支援や生徒たちへの声かけ等の自然な関わりを大切にする生徒指導

を実践している。また児童養護施設から通っている生徒たちの心の動きを知るためにも日々施設との連絡・連携・報告を大切にしながら、生徒間におけるなかまづくりに配慮している。

・　ほのぼのルーム（別教室）の活用は、教室へ行けない生徒への支援室として有効に活用することが大きな目的で、全教師が対応している。なお、ほのぼのルーム入級については、生徒指導小委員会と当該学年（担任、学年主任等）で協議し、決定する。

・　年２回の養護施設との交流会をする。

③　命の大切さを伝える

本校は、国道24号線に隣接した位置にあるため、登下校における交通安全指導は重点課題である。また、本校ＰＴＡ青少年健全育成委員会をはじめ市青少年センター､警察の生活安全課と常に連携しながら非行防止あるいは安全確保に努めている。校外で何かあれば、口頭指導はもとより、ペーパー、さらにはメール配信等で事故防止を保護者や地域に呼びかけている。また、「命の大切さ」を一人一人の生徒に道徳の授業はもとより、学年集会や全校集会等で継続的に伝えている。

・　定期的に通学登下校指導及び危険箇所の点検を行う。

・　不審者、不審車両チェック表を全生徒に配布し常備させる。

2　成果及び課題

日々の職朝での報告・連絡そして放課後等における相談等が定着してきた。毎月、開催する校内生徒指導委員会での情報・課題等を担当者が持ち帰り、学年課題、学校統一課題を各学年会議や人権教育推進委員会等で熟考し、実践に繋げていただいている。しかし、学校の状況は絶えず変化する。後手になってしまう生徒指導上の問題も起こっている。やはり、早期発見・早期対応への取組をしてこそ、積極的な生徒指導ができたと言えるのではないか。今後においても、問題行動の未然防止や早期解決のための体制づくりの積み上げを行っていきたい。そのためにも全職員の共通理解の下、人権教育を核に据えながら「自他の生命や権利を尊重し、自他を身体的にも心理的にも傷つけてはいけない」という規範意識の根幹に迫る生徒指導体制を構築していきたい。

分野番号２　中学校　進路指導の部

生徒の視野を広げるためのゲストティーチャーの効果的な活用について

香芝市立香芝中学校　教諭　中井　立

１　実践内容

香芝中学校の学校サポート体制のコーディネーターとして５年目を迎えている。これまで学校にボランティアを迎え、図書、園芸、学習補助などいろいろな活動に取り組んできた。その中で特に力を入れてきたのが、ゲストティーチャーを迎えた講演会である。現在の３年生では、３年間を通じて合計20回、延べ30人以上のゲストティーチャーを招くことが出来た。ゲストティーチャーを迎えるに当たっては、まず、生徒たちに身につけさせたい内容や行事などとの関連を明確にし、時期とテーマを決定した。これまで取り上げたテーマとしては、いじめをなくすための取組、高齢者や障がい者問題、ボランティアに関すること、福祉体験に関すること、命の大切さについて、規範意識を高める取組、職場体験に向けての取組、愛校心につながる学校の歴史、震災から身を守る防災意識、捨てられる動物の命、国際理解、進路に関することなどである。また、ゲストティーチャーの経歴は、本校を退職された先生や校長先生、元化粧品会社役員、いじめから子どもを守る活動をされている方、地域でボランティア活動をされている方、阪神淡路大震災で活躍された元尼崎消防署長、高校の現役校長、現役の大学の留学生など様々であり、県内外各地から来校いただいた。

ゲストティーチャーの依頼は、地域の方々や学校支援コーディネーターなどのたくさんの方々による紹介を中心に広がり、いろいろな分野の方に来ていただくことが出来ている。このゲストティーチャーの取組は、多くの生徒に一斉に伝えることができるので学年集会形式で実施している。運営に関しては、教師主導ではなく、司会、進行、ゲストティーチャーの誘導、看板の製作、お礼の言葉などすべて生徒の手で実施することにしており、生徒の自主的な活動を引き出す取組にもなっている。また、テーマやねらいに迫るために事前学習を実施し、予備知識のための学習や事前の質問を考えさせたりして、興味関心を持たせている。ゲストティーチャー講演会終了後も感想を書かせ、お礼の文も書かせることで、自分の考えを表出させるとともに、ゲストティーチャーへの感謝の気持ちを持たせるようにしてきた。このゲストティーチャーによる取組の良い点は、様々な分野における直接「生の声」を聞くことで、教師から話を聞くより新鮮で、生徒の心に入り易いこと。多様な経験をされた方の話で、様々な生き方に触れることが出来ること。また、ゲストティーチャーの方々が中学生だった頃の話を入れていただくことで、今の自分たちが大切にしなければならないことなど、生徒たちにいろいろなメッセージをいただけることなどである。

［具体的な取組の例］

(1)　いじめのない学年をめざした取組

テーマ　「いじめのない学年にするために、今、必要なこと」

NPOいじめから子供を守ろう！ネットワーク奈良代表　栗岡まゆみ様を招いて、いじめの実態やいじめ対策（人間関係のルール）などを学び、いじめのない学年を作る

取組を行った。

(2)　基本的生活習慣・規範意識を高める取組

テーマ　「中学生として、今、身に付けなければならないマナーについて」

学校法人永井学園鹿島学園高等学校連携奈良キャンパス学校長　高山龍博様を招いて、マナーは、互いに心地良い空間を共有するための道具であることや、マナーのできている人間は、信頼され、良い人間関係が築けることなどのマナーの大切さを実習を通して学んだ。

(3)　清掃活動の大切さを伝える取組

テーマ　「トイレの神様」

退職された先生をゲストティーチャーとして招き、「トイレ清掃」を通して清掃活動の大切さと清掃が心を鍛え、進路にもつながっていくことを学んだ。

(4)　命の大切さを学ぶ取組

テーマ　「小さな命から学ぶ」

捨てられた動物（犬）を自宅でしつけ直し、里親に出すという活動をボランティアで行っている方々を招き、家庭で飼われているペットが要らなくなったら物のように捨てられる現状と「いのち」が簡単に扱われている現状があることを学んだ。保護犬に触れることで、小さな「いのち」を感じ、「いのち」を大切にする心を育むことができた。

2　成果及び課題

ゲストティーチャーの取組は３年目を迎えているが、生徒たちはゲストティーチャーを通じて、様々な話を聞くことで、視野を広げ、少しずつではあるが、幅広く考えることができるようになってきている。また、この取組は、自分の人生を考える良いきっかけにもなっており、キャリア教育の視点からも大切と考える。ゲストティーチャーをはじめ、図書ボランティア、園芸ボランティア、学力支援ボランティアなど、たくさんのボランティアの方々に学校に来ていただくことは、生徒にとって、学校の中で教師以外の地域の人や異年齢の人たちとの交流や出会いがあり、人生の中での大きな経験となると思われる。なお、今年度は学力補充の取組として、３年生対象に入試対策講座を企画し、元高等学校の先生を招き、学力アップ講座を実施している。今後は全学年への学力補充講座が実施できるように考えている。課題としては、このゲストティーチャーの取組が学年のみの取組に終わらず学校全体の取組になるように、生徒指導、進路指導（キャリヤ教育）、道徳教育、人権教育（障がい者問題、国際理解、いじめ問題など）、学習指導など、それぞれの分野に応じて実施学年や実施時期などを検討し、計画性をもって実施していく必要があると考えられる。

3　その他参考となる事項

香芝市立香芝中学校ホームページ　http://www8.ocn.ne.jp/~kachu/

分野番号４　中学校　部活動の部

生涯スポーツを意識した部活動の在り方

奈良市立春日中学校　主幹教諭　中川　雅之

１　実践内容

32年前に本校に赴任し、卓球部の顧問として生徒と一緒に活動する中で、「勝つこと」を目標にしながら毎日練習をしてきた。生徒に達成感を持たせることが荒れた学校を落ち着いた学校にすると信じ、全教師で取り組んだ結果、大きな荒れは治まってきた。この間、卓球部は、１年中ほとんど休みなく練習し、近畿大会に４回、平成５年には全国中学校総合体育大会に出場できた。

平成12年に本校に再赴任したときの実態は、一見落ち着いているように見えるが、学校外の問題行動は多く深刻な状況にあった。卓球部も指導者がなく、部員不足もあって廃部寸前であった。

卓球部に入部してくる生徒の多くは、基礎的な体力や運動能力が低い状況にあった。そのため目標を次の３点として再出発した。

①　基礎的な体力をつける。

②　ルール・マナーを守る。

③　卓球を好きになる。

「勝つこと」から「卓球を好きになること」へ考え方を変え、生徒とのコミュニケーションを図り、生徒の自主性・自発性を尊重し、自ら動きたくなる（卓球したくなる）環境を作り、目標達成のために必要な知識・技術を付けさせることにした。

隔日の体育館での練習では、フォアハンド、バックハンド、切り替えなどの基本練習を中心に行い、２分間で140往復のラリー、15秒間で21往復のラリーが常時できるようにした。日々の練習の最後に、この練習を取り入れることにより集中力が維持できる他、具体的な回数を目標としているので、各自で目標を上げ意欲・技術が向上した。

外での練習の日は、ランニング、筋力トレーニング、シャドープレイなどを行い、１時間程度で終了することとした。短時間で練習することで集中力を高め、時間的な余裕を与えるためである。また、校内美化活動にも参加し、中庭花壇の管理を卓球部で行い、生徒と顧問が共に汗を流す中でコミュニケ―ションを図ることも心がけた。

一方、長年、私は、奈良市の卓球教室の指導者として、勤労者、小学生、高齢者と関わってきた。そこで知り合った人たちに卓球ができる場として本校体育館を開放して、生徒たちと練習することができる「地域に開かれた部活動づくり」を進めた。土曜日や日曜日には卒業生、保護者、地域の方、小学生が練習に参加して、生徒たちは、学ぶこと・教えること・考えながら運動することの楽しさや達成感などを感じることができ、心身共に成長していった。その結果、平成17年～19年には３年連続県中学校総合体育大会優勝、平成23年度近畿中学校総合体育大会優勝という快挙を達成し、奈良県中学校体育連盟表彰を受賞した。

日中友好30周年記念大会に代表として北京に行った生徒、県で優勝し近畿・全国大会に出場した生徒、日韓青少年夏季スポーツ交流大会に日本代表として韓国に行った生

徒など、たくさんの貴重な体験をした者が、今でも卓球を続けており指導者として活躍している者もいる。

いくつになってもできる卓球を多くの人たちが楽しみ、生涯スポーツとして活動してほしい。今後も､そうした活動を続ける後進の指導にあたっていきたい。

2　成果及び課題

(1)　昨年度、近畿中学校総合体育大会で優勝という偉業を成し遂げてくれた。これは、春日中卓球部をとりまく地域全体での勝利であり、地道な努力の結果と確信する。

(2)　さほど運動能力が高くない生徒たちが最後の最後に150％の力を発揮した。自信と大きな力を身に付けて、進路を開拓していった。

(3)　生徒は、退部することなく楽しく練習をしている。引退後も週に１回は参加している。そして、ほとんどの卒業生が高校でも卓球を続けている。社会人になっても現役で活躍している者もいれば､レクリエーションとして卓球を続けている者、指導者として中学生や小学生を教えている者もいる。

(4)　卓球というスポーツを通じ、生涯にわたって必要な｢生きる力｣の基礎を培うためにも技術も磨いていきたい。

(5)　昨年度から新入部員が減少して部員の確保が課題であるが、地域に開かれた学校づくりの中、卓球を通じてその輪を広げていきたいと考える。

3　その他参考となる事項

平成24年３月　全国卓球選抜大会出場

平成24年８月　日中友好40周年記念卓球大会出場

日韓青少年夏季スポーツ交流大会出場

分野番号６　中学校　学校教育目標の具体化の部

学校組織を高める教務主任としての取組

橿原市立光陽中学校　教諭　岡田　守弘

１　実践内容

本校で教務主任として４年目になる。職員全員の充実した教育実践を保証することが私の職務と考え、取組を進めてきた。教務主任１年目より、「ヘッドワーク、チームワーク、フットワーク」をキーワードに、職員間の連携を深め職員の組織力を高めることで、よりスムーズな学校運営が行われることを目指した。以下、その概要である。

(1)　ヘッドワーク

「必要な会議は設定し、時間をかけ詳細な会議の原案を作成する。」

①　毎朝の事前打合せ

管理職、学年主任、生徒指導主事、教務主任が、毎朝校長室に集まり、その日の予定の確認、前日の出来事・取組の報告などを行い、必要があれば全体の職員打合せで報告・提案する。

②　毎学期の分掌会議

４月に各分掌の年間活動計画を作成する。２、３学期始めには計画を再検討し修正する（３学期は総括を含む)。職員会議への提案の際は、各分掌でよく検討し原案を作成する。なお、生徒指導部、人権教育部、教育相談部は、週１回の部会を時間割上に設定。

③　毎月の運営委員会・職員会議・学年会議

運営委員会で職員会議の原案の検討を行い、修正が必要な場合は、再度分掌会議で修正案を作成する。そして運営委員会→職員会議→学年会議の順で計画を具体化する流れを確立させる。

(2)　チームワーク

「各学年や分掌の計画を全職員が共通理解することで協力体制を築く。」

①　学年、分掌年間計画

各学年や各分掌の年間計画を冊子にまとめ全員に配布する。それぞれの学年の方針や分掌の活動計画及びそれらの役割分担を確認することができる。

②　学年行事計画

学年独自の行事等は、事前に計画を配布し他学年の理解・協力を得る。

③　総括会議

各分掌に対する改善案の提出(単なる反省や批判ではなく具体的な改善案の提出)→各分掌総括会議→全体総括会議の順に行う。各分掌総括会議の内容を冊子にまとめ事前に全職員に配布する。

(3)　フットワーク

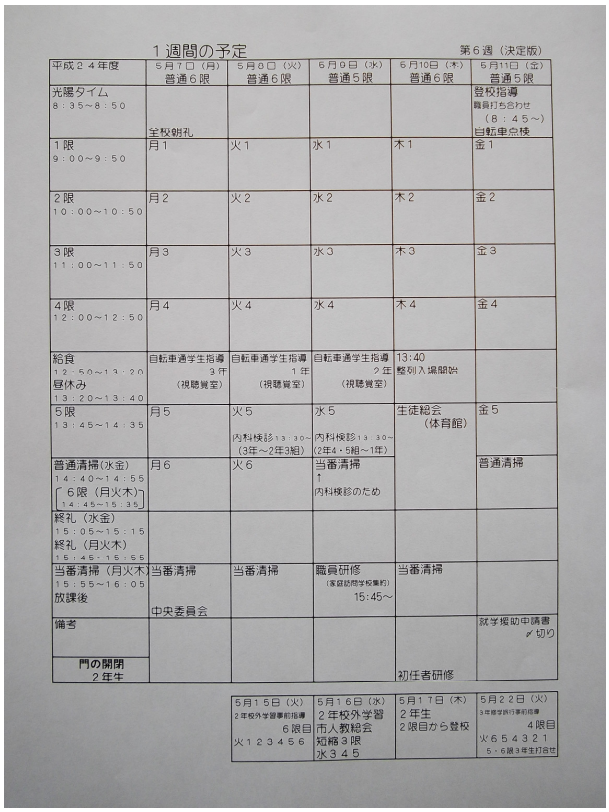
「必要な予定を的確に伝えることで、素早く確実な職員の動きをつくる。」

①　１週間の予定

毎週金曜日に時間割表形式の次週１週間の予定を全職員に配布する。これにより生徒・教師の動きをしっかりと確認できる。また、今後の予定の追加・変更も掲載する。

② 学期行事予定

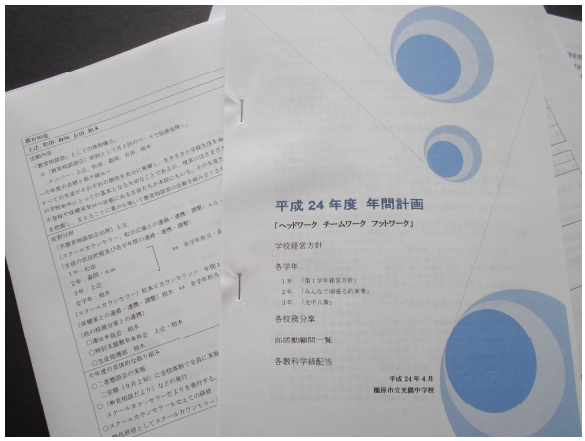
学期始めに行事計画をもとに授業時数を試算した上で、曜日変更等を掲載した中期的な予定を配布する。



１週間の予定　第６週（決定版）

平成２４年度	５月７日（月）普通６限	５月８日（火）普通６限	５月９日（水）普通５限	５月10日（木）普通６限	５月11日（金）普通５限
光曜タイム 8：35～8：50	全校朝礼				登校指導 舞員打ち合わせ（8：45～）自転車点検
１限 9：00～9：50	月１	火１	水１	木１	金１
２限 10：00～10：50	月２	火２	水２	木２	金２
３限 11：00～11：50	月３	火３	水３	木３	金３
４限 12：00～12：50	月４	火４	水４	木４	金４
給食 12：50～13：20 昼休み 13：20～13：40	自転車通学生指導 ３年（視聴覚室）	自転車通学生指導 １年（視聴覚室）	自転車通学生指導 ２年（視聴覚室）	13:40 整列入場開始	
５限 13：45～14：35	月５	火５ 内科検診13：30～（3年～2年3組）	水５ 内科検診13：30～（2年4・5組～1年）	生徒総会（体育館）	金５
普通清掃（水金）14：40～14：55 ［６限（月火木）14：45～15：35］	月６	火６	当番清掃 1 内科検診のため		普通清掃
終礼（水金）15：05～15：15 終礼（月火木）15：45・15：55					
当番清掃（月火木）15：55～16：05 放課後	当番清掃 中央委員会	当番清掃	職員研修（家庭訪問学校集約）15:45～	当番清掃	
備考 門の開閉 ２年生				初任者研修	就学援助申請書 ↙切り

5月15日（火）	5月16日（水）	5月17日（木）	5月22日（火）
2年校外学習事前指導 6限目 火１２３４５６	2年校外学習 市人教総会 短縮３限 水３４５	2年生 2限目から登校	3年修学旅行事前指導 4限目 火６５４３２１ 5・6限3年生打合せ



平成 24 年度　年間計画

「ヘッドワーク　チームワーク　フットワーク」

学校経営方針

各学年

1年　「第１学年経営方針」

2年　「みんなで頑張る約束事」

3年　「元中人賞」

各校務分掌

部活動編間一覧

各教科学級配当

平成 24 年 4 月

福原市立光陽中学校

上：学年、分掌年間計画

左：１週間の予定

２　成果及び課題

こうした取組を始めた当時は、会議の回数が増えることで、「職員個々の業務時間が減少する」、「部活動指導が制約される」などの不満の声があった。しかし、会議を重ね、職員会議に提出する原案を各担当で充分検討してもらった結果、逆に職員会議の時間を短縮することができた。また、予定や計画を的確に全体に伝えることで、急な変更の必要もなく職員個々の取組の計画が事前に立てやすくなった。結果的に、学校全体がスムーズに運営できるようになったと言っても過言ではない。また、毎朝の事前打合せのおかげで、生徒指導主事や各学年主任から報告された現状や取組を学年主任を通してそれぞれの学年の職員へ詳細に伝えることができ、他学年の実態を容易に把握できるようになった。以前は他学年の批判がよく聞かれたが、今では学年間の理解が深まることで、協働意識も高まり学校全体のまとまりができてきた。しかしながら職員はまだまだ多忙で、仕事に偏りがあることも事実である。今後の課題は、学校組織の改善や事務的な作業の効率化をすすめ、職員の時間的・精神的な余裕を今以上に生みだしていくことである。これにより、①職員間の連携の強化、②生徒や保護者に関わる時間の増加、③職員の研修が充実する学校にしていきたい。

分野番号６　中学校　学級経営の部

生徒の発信力や協働意識を育てる自主活動We Can Projectについて

奈良市立富雄中学校　教諭　渡邊　静夫

１　実践内容

2012年11月７・８日、学校開放日に古本チャリティ・バザーが開催された。不要になった古本の寄付を募り、集まった古本をバザーで販売して、その収益をユニセフに寄付する古本チャリティ・バザー。これは５年前の文化発表会での学級展示から発展し、全校で取り組む生徒会行事となった。

また、昨年の文化発表会では、東日本大震災の被災地への支援をテーマに１学年８学級が協働して展示発表に取り組むとともに、古本チャリティ・バザーでも震災支援を目標に掲げ、収益を東北と十津川に送った。また、学級では文化発表会以後も石巻市の中学校と手紙での交流を続けている。「中学生の私たちができること」の意味を込め、これらの取組をWe Can Project と名付けた。

(1)　We Can Projectの始動

2008年、文化発表会の学級展示では、社会や世界に目を向け、生徒に発信させることを目標にした。まず、ユニセフの視聴覚資料を視聴した。５歳の誕生日を迎えられずに亡くなっていく子どもが３秒に１人いること。きれいな水が飲めずに亡くなっていく子ども。学校に行けず働いている子ども。兵士として戦場にかりだされる少年兵。そして、ユニセフの活動内容。

世界の子どもたちの厳しい現実を学習した生徒たちは「自分たちは何ができるのだろう」と考え始める。そして、自分たちが知ったことを少しでも多くの人に伝えることも、自分たちができることの１つだと考え、文化発表会の学級展示に向けて自主的に活動した。

自分たちの言葉で作ったパンフレット、ユニセフのポスター展示、VTRの放映、濁った『水』の展示物、クイズ、クラス全員が書いた『自分たちでできること』のカードパネル、地雷についての掲示物、「ユニセフへ100円募金すれば何ができるか」を示した掲示物など、どれも自分たちで考え、作成した。文化発表会の展示時間には、たくさんの生徒や保護者が見学に来てくださった。『水』の展示では、子どもたちが毎日40分かけて運んでいる14kgの水の重さを実感してもらった。

(2)　古本チャリティ・バザーの提案・生徒会の協力

さらに、中学生が協働することでできる募金活動として古本チャリティ・バザーを学級で考えた。しかし、学級展示でお金を扱うことは許可されなかった。そこで、生徒たちは生徒会で古本チャリティ・バザーを実現させてほしいと提案し、生徒会の協力を得て2008年11月12・13日の学校開放日、古本チャリティ・バザーが実現した。

その実現に当たっては、私は広報用動画の作成等の最小限のサポートは行ったが、生徒会への提案、呼びかけの文書作成、古本の整理や販売、写真と言葉を添えた手作りしおりの作成等の生徒たちができることはすべて任せた。生徒たちは精力的に活動し、中学１年生でも多くのことが可能であることが実感できた。

(3)　被災地の中学生との手紙交流

2011年3月11日の東日本大震災の信じがたい惨状を見聞きし、世界中の誰もが自分は何ができるのかを考えていた。中学生も同じである。2011年の文化発表会では、被災地の支援を共通のテーマに取り組むことを学年に提案し、第１学年の全学級で取り組んだ。エコカーテンの栽培、被災地と支援の状況、被災地との交流等、各学級が工夫を凝らし、充実した展示発表となった。

被災地との交流を担当した自学級では、物資や義援金等の一般的な支援ではなく、中学生ができる支援について話し合った。生徒たちが考えたのは、「同じ中学生と友達になること」だった。被災地の中学生と手紙での交流を目指し、学級全員が手紙を書いた。それをデジタル化し、笑顔の写真を添えて、メールでいくつかの被災地の中学校に送った。そして、石巻市の中学校との文通が始まった。

最初に帰ってきた手紙には非常に丁寧なお礼の言葉が綴られていたが、２回目の手紙からは、学校名宛だった手紙が生徒の個人名宛の手紙になり、「麗春の候、皆様お元気ですか。ここからはため口。もういいよね。」と中学生らしい言葉が綴られるようになった。以来、個人と個人の手紙のやりとりになった。２年生になり学級が解体しても新しい学級で手紙交流に参加する友達を増やしており、この秋で４往復目の手紙を送った。生徒たちは返事を心待ちにしており、今後も末永く交流が続くことを願っている。

2　成果及び課題

学級から提案した古本チャリティ・バザーは、生徒会活動の１つの柱になり、定着している。古本チャリティ・バザーには、生徒だけでなく多くの保護者も集まってくださった。自分たちが発信することに多くの人が応えてくれたことに生徒たちは大きな達成感を感じており、この達成感が次の意欲につながっている。

生徒たちは意義を感じると意欲的に活動する。後は、型にはめるのではなく生徒に委ねる場面を増やして待つことも重要である。そこから教職員が思いつかないような新しい発想も生まれる。中学生が持つ発信力を生かした自主活動を展開するには、従来の活動形式にとらわれない想像力が必要である。

また、昨年度の古本バザーでは１千冊を超える古本が集まったが、それはポスターを見た地域の方々が数百冊もの古本を寄付してくださったからであり、学校から地域に向けて取組が広がっている。今後は、地域の方々との協働も考えていきたい。

この取組は、私個人ではなく、学校スタッフの協働で実現している。私の役割は、若い世代のスタッフとのコミュニケーションを大切にしながら、方向性を示し、イメージ広げることである。また、担当者に取組を委ねつつ、適切な助言とサポートを行うことである。

この取組を進めてきた数年間で50代世代の役割について意識するようになった。分掌や学級・学年で取り組むのが基本となっている学校現場では、それらを超えてチームで協働する意識はまだまだ稀薄である。世代間のコミュニケーション不足や若い世代への仕事の移行が進んでいない現状もある。その中で、50代世代がいかに若い世代に仕事を委ね、サポートしていくべきかを意識し、様々な場面で実行していきたい。

3　その他参考となる事項

奈良市立富雄中学校ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ　http://www.naracity.ed.jp/jhs01/index.cfm/10,html